
守護を誓う拳と少女達の日常

八神 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護を誓う拳と少女達の日常

【Nコード】

N8452X

【作者名】

八神 唯

【あらすじ】

ロリコンな「ロリコンじゃねえ！」青年とロリな魔法少女達の只主人公が少女達にハアハアする「しねえよ！」日常のおはなし
青年はいつ逮捕されるのか「逮捕されるような事はしてねえ！」少女達はどうなってしまうのか！「俺がどうかなっちまうわ！」
「五月蠅いで…ロリコン」「ロリコンじゃねえ！」

五月蠅い主人公だな

しょうがない

何度でも立ち上がり少女達を護る青年とそんな青年を護るために頑
張る少女達の物語

こんな感じでいいか？

「もうやだ…この作者」

この作品は作者の処女作です

オリ主・原作ブレイク？・暴走・誤字脱字・ドン亀更新等々含まれ
ています

苦手な人は帰りはあちらです

プロローグ？（前書き）

楽しんで頂けると幸いです

感想などお待ちしております指摘などでも全然結構です

感想で投稿スピードがあがるかも？

壁—— ・、（チラッ

プロローグ？

最初に言っておくことがある

とても大事なことだからな…

二度でも三度でも言うからな！

忘れるなよ？お兄さんとの約束だぞ！

では…言うぞ…

俺は…俺はロリコンじゃねえええ！

俺は何処にでも居そうな高校生だ

武術を嗜んでいて、岩を素手で割れたとしても断固一般人を主張させてもらう

まあ、なんだ…あのセリフが俺の口癖のようになってしまったのは理由がある

今から丁度二ヶ月ぐらいまえに、俺はある車椅子に乗っている少女…いや美少女？に出会った…。

そいつは、優しくして…お茶目で…強くて

そして…弱かった

自分で言っというてなんだが矛盾していると思う

だけど、本当に強くて弱い

強いが故に弱い

自分の本音や気持ちを色んな物でガチガチにコーティングしているから、いざコーティングを剥がされると直ぐに壊れてしまう

わかりづらと思うが俺の頭ではこんな説明しか出来ないのが歯痒い

ただほっとけなかった…だから声を掛けた

声を掛けた俺に対して、あいつの第一声は

「なんや？私みたいな幼女に声掛けて…お兄さんロリコンかいな」

思わず涙を流しながら

「なん…だ…と？」と言ってしまった

泣きながら呆然としてる青年とそれを見て爆笑している車椅子の幼女

物凄いシニールだと自分でも思う

今では笑い話になってる…あいつの中では

俺は笑えねえ

そんな出会いは俺の人生を大きく変えた

良くも…悪くも…

でも…もしこの世界に神様ってえのがいるなら

俺は感謝したい

あいつに…はやくに会わせてくれでありがとうって

そして約束をしよう…どんな事が起きようともはやくの味方になっ
て護るとこの拳に誓って

プロローグ？（後書き）

始めて小説を書きましたが、とてもたいへんですね（ー；）
他の作者様を尊敬します
ではまた会いましょうノシ

二ヶ月前〜日常の始まり〜（前書き）

第二話です

タイトルそのまま主人公とある少女の出会いとなっています
また楽しんで頂けると幸いです

書き終わって気づくと結構な長さになってしまいました（ー；）

二ヶ月前〜日常の始まり〜

「はぁーっ…せい!」「シユ!

「」「はぁーっせい!」「」「シユ!

ある道場で青年は少年少女達と共に鍛錬に励んでいた

「よし!昼だし今日はここまでですつかあ」

「」「ありがとうございます!」「」「

「先生今度はもっと凄いの教えてください!」

「おう、また今度な」

「じゃあ僕は…南斗Zy」

「おい馬鹿やめろ、どこで覚えてきたそれ」

「私は…崩壊している瓦礫の中でまるで散歩でもしているかのよう
に歩いているだど!…って感じの技がいいです!」

「おう、いいぞー今度手取り足取り教えてやろう」

「優夜先生!私は百烈拳をおしえて」

「ここを世紀末にでもする気かお前達は、それ意外ならいくらでも
教えてあげるから取り敢えずそれはやめようか」

「北斗の文句は俺に言えー！」

「おい！だからやめろと言ってるだろうが」

門下生の少年少女と色々と危ない会話をしているのがこの作品の主人公優夜こと皐月優夜である

「飯だからさっさと帰れ親御さんが心配するぞ」

「先生さようならー」

「おう、気を付けて帰れよ」

「優夜先生またねー」

「怪しい人に付いてったら駄目だからなお菓子も貰ったら駄目だからな怪我はするなよ絶対だからな先生との約束だぞ」

「はい」

少年少女が帰り道場が先程ど違い静かになった頃道場に1人の老人が入って来た

この老人は道場主であり主人公の祖父でもあら皐月玄帥である

「優夜よ、今日もすまなかつたな」

「いいよ、俺も楽しくてやってんだからよ」

「そう言ってくれると助かるわい」

「いい歳なんだから若い奴に任せとけばいいんだよ…爺さん」

「言ったな小童が、まだお前に負けるつもりはないぞ」

「はっ、来いよ爺さん今日こそ越えてやんよ」

「ほっほっほ、今日も何時ものように床にお寝んねさせてやるわい」

「行くぞ！はあーっ」

優夜は舜歩を使い玄帥の目の前に行き右の拳を放った

「少しは早くなっただが、土郎の神速にくらべればまだまだ遅いわ」

ほいっと玄帥は何事もないように優夜の拳を横に受け流した

「まだたあ！」

優夜は受け流されるのを予測していたのか拳を受け流されたのを利用してそのまま右の脚で蹴りを放った

「まだ粗いのお、よっつと」

玄帥がそう言った瞬間優夜の身体は宙に浮いていた

「マジかよ？でもまだ手はある！おらあ！断空きゃ…ぐはあ！」

優夜が何かをしようとするのを玄帥がただ見ているだけもなく優夜の腹に掌底を食らわせた宙に浮いていて尚且つ技を放とうとしてい

た優夜がガード出来るはずもなくそのまま吹き飛び床にお寝んねと
なった

「空中で放とうするとはのお、無理な体制に何も力を練り上げてな
い断空など食らう訳なかるう」

優夜が床から起きながら悔しそうに

「やっぱり駄目かぁ、爺さんがもう少しボケてたらあたると思っ
たんだがな」

と負け惜しみを言い始めた

「馬鹿もの、まだわしはボケとらんわ！」

玄帥がそう言いながら優夜の頭を軽く殴った

「痛いぞ爺さん」

恨めしいそうに言ってる優夜を無視し玄帥が

「そついえば優夜よ…」

「な、なんだよ爺さん」

何時もに増して真剣な玄帥に驚きながら優夜が聞いた

「……飯はまだかのお」

「……何言ってるのお爺さんさっき食べたばかりでしょ」

「……………」

無言で見つめ合う二人そして玄帥が優夜に近づきそっと抱くように腰に手を掛け…そのまま投げ捨てた

「お前がいつ昼飯を作るのか聞いておるんじゃ！この馬鹿者があ！」

「投げっぱしジャーマン？ぐへえ」

再度床にお寝んねとなった優夜に玄帥はさらに言葉で追い討ちを掛けた

「因みに…冷蔵庫の中は空っぽじゃ」

「マジかよ…何が食いたいだ爺さん」

「肉が食いたいのお」

「昼から肉かよ…まあいいか、シャワーとか浴びたら買い物に行ってくるわ」

「今すぐ買ってこんか、腹が減つてるといつとるではないか馬鹿者」

「理不尽だなおい…しゃあない着替えたらずく行ってくる」

「30秒で支度しな！」「うるせえよ？」

（10分後）

玄関に着替えをしました優夜がいた

「それじゃあ行って来るよ」

「30秒で支度しろと言ったのに…」

「まだ言うか？」

そんなこんなでやっと優夜は材料の調達へと向かった

もし冷蔵庫に昼飯の材料が有ったり、シャワーを浴びていたらきつ
とあいつとは出会っていなかっただろう

ウィーン

とある青年が…と言うか優夜が買い物袋を持ちながらスーパーから
出て来た

「これぐらいあれば明日の夜まで保つだろう」

現在優夜は玄帥と2人で住んでいるのである
なので基本そこまで材料を買い込まなくても大丈夫なのである

「…ん？」

「買い過ぎてもったわあ、失敗やあ」

優夜が？丁度自宅に帰ろうとした時、今スーパーから出て来たのが多めの買物袋を持って車椅子に乗った幼女が優夜の後ろにいた

（なんでこんな子供が1人で買物に？車椅子に乗ってるし脚が悪くないか？周りの奴らもそうだし、何よりこの子の親は何をしてるんだ？それに…なにかわからないが違和感がある…ほっとけないなあ、声でも掛けるか）

この時は俺はこれから何年もの付き合いになるとは全く思わなかった

優夜は車椅子の幼女に声を掛けた

「ちよつといいか？1人でそんなに荷物持つの大変だろう？ましてや車椅子だし、少し俺が持つてやるよ」

（なんやこのお兄さん私に声を掛けてくる人なんて石田先生だけやっただけど…まあたしかにこの荷物を運ぶのは大変やけど普通は面倒くさがるか腫れものを見る感じになるのに私みたいな娘に声を掛けるってもしかして…このお兄さんロリコンかいな？）

「お兄さん…ロリコン？」

私がそういった瞬間お兄さんの顔が、なん…だ…と…？って感じになった

「なん…だ…と」

実際言つとるし、何か泣いとるしそれもマジ泣きっぱい

ちよつと怖い、でも段々と可笑しくなってきたお兄さんの顔がツボに入ってしまった

「ぶふっその顔やめて、わ…私のふ…腹筋がねじ切れる…ふふ」

私が笑っているとお兄さんが何かを呟いてた

「ろ…」…じゃ…」

「お兄さんどうしたん？」

「俺はロリコンじゃねえ！」

「ひゃあ？」

「確かに小さい子供は好きだが、決して！ロリコンでは！ない？」

「疑問系？なんか最後だけ自信ないんやけど？」

「ロリコンじゃないロリコンじゃないロリコンじゃない…ぶつぶつ」

「なんや私あかんキーワード言ってもうた？」

「よし！俺はロリコンじゃない！」

「おお今度は言い切ったわ」

「と言う訳でその荷物は俺が持つよ」

「どう言っ訳かわからんのやけど、その…お願いします」

「ん…了解…家まで大丈夫か？」

「はい、家までで全然大丈夫です」

優夜は少女の荷物を持った、それなりの量なのだが優夜は普段鍛えているので普通に持っている

「お兄さん力持ちなんやね」

「おう、普段鍛えているからな」

少女の驚きは当然である、なんせ優夜は見た目だけなら細身だからである

「そういえば自己紹介してなかったな…俺は皐月優夜、わかりづら
いが皐月は五月の難しい方で優夜は優しい夜って書くんだ」

「私は…私は八神はやってっつていいます、八神は八に神はやては平仮
名…文字ではやってっつて言うんや、へんな名前やる？」

「変じゃないだろ、似合っつてて可愛い名前だろ」

何言っつてんだっつて感じに優夜は言ったが、あまり免疫がないはやては

「~~~~はう」

見事に顔が赤くなっていた

「ん？どうかしたか？」

「な、なんでもナイデスヨ…あ、あはは…あ、私の家そこなんよ」

自己紹介等々をしていたらはやての家まで着いたみたいだった

「意外に俺ん家から近いな…て言うか御近所？」

「え…そうなん？」

「ああ俺ん家は彼処」

優夜が指を指したのは四件隣の広い武家屋敷だった

「あの家が優夜さんの家なんかあ、デカくてビックリしたわあ」

「大きくても住んでいるのは2人だけだしなあ、そう言うはやての家こそ大きいだろ」

「私の家こそこんなに大きくななくてもええんやけどな…」

「どう言う事だ？」

「両親が死んでから家に住んどるのは私1人なんや」

（くそっ！そういうことか…だからか、1人で買い物行ったりあんなほっとけない感じだったのは）

「……………」

「でも大丈夫やで、グレアムさんっていう親戚の人が生活費を振り込んでくれるからお金に困ってないし、掃除とかも1人で出来るから…そう言えば優夜さんはお昼ご飯は食べました？私結構料理得意

なんやで！荷物運んでもらった礼とかでござ馳走したいんやけどええ
？」

（お金だけ払って満足しているグレアムって奴も腹立つがはやてに
こんな顔させている自分に一番腹立つ、おまえ自分じゃ気付いてな
いと思うが凄く寂しそうな笑顔をしているんだぞ？ほっとないだろ
うがよ！）

「だ、駄目なんか？」

（なんて顔させてんだよ！馬鹿か俺は！）

「駄目じゃない、お邪魔させてもらうか」

「ホンマか？腕によりを掛けて作るわ！家に上がって！」

（いい笑顔できんじゃないかねえかよ、可愛いなおい…ロリコンじゃねえ
ぞ？って誰に言い訳してんだ俺え…）

「優夜さんこっちやで！」

「おう、荷物は台所でいいのか？」

「台所でええで、荷物置いたら優夜さんはリビングのソファで休ん
でてな！」

「手伝わなくて大丈夫か？」

「一人でやりたいんよ」「了解しましたよっ」と

手伝いを断られた俺ははやてに言われた通りソファで待ってる事にした

(張り切ってたんな…まあ料理は得意って言ってたし期待してるか)

〜10分後〜

「優夜さん料理出来たでー!」

途中から…あれ?これがはじめて女の子に作ってもらう手料理?…と若干そわそわしながら待っていると料理が出来たみたいだ

「今行くー!」

そう返事をしてはやての元に向かった俺ははやての前に並んでいた料理を見て驚愕した

「なんか豪勢だし…美味そうだし…よく作ったな」

簡単に言えばハンバーグ定食である、ご飯・ハンバーグ・茸のソテー・サラダにスープ…なんて豪勢なんだ

俺は静かに席に座り箸を持って魔法の言葉を言った、それは闘いの始まりの合図である

「いただきます!」

ハンバーグを口に入れた瞬間俺は叫んでいた

「う、美味えええ!」

「なんや、恥ずかしいなあ」「マジで美味いぞはやて！」

「ご飯もおかわり一杯あるから遠慮せんで食べてな」

「おう！」

そんなこんなで食事が終わり作ってくれたはやてと食材に感謝を

「ごちそうさまでした」「お粗末様でした」

「いやぁーマジで美味かった！俺もここに住もうかな！」

「ホンマに？優夜さんここに住んでくれるんか？お兄ちゃんになつてくれるんか？」

「え？お…う…うん？」

（ここまではやてが家族に飢えているとはおもわなかった…どうしたものか…腹くくるしかなえか）

「あ…ご、ごめんな私一人で舞い上がって…軽い冗談やなわかつとるで」

（本当に馬鹿だな俺ははやてにこんな顔させたくないから来たんだろ！答えはもう決まってる…後は言葉にするだけだ）

「冗談じゃねえぞ、はやてが良いってんなら家族にでも兄貴にでもなつてやるよって泣いてる？」

「ほ、ホンマに？」「ああ本当だ」

「嘘や冗談じゃないんか?」「ちっとは信用しやがれ」

「…ありがとう優兄!」

(ああやべえなこれ…絶対顔赤くなってるんだろ俺、破壊力あり過ぎだろ…ロリコン云々よりシスコンになるの決定だなこれ)

「やっぱり優兄って…ロリコンやろ」

「ロリコンじゃねえ!」

これが俺達の始まりである

優しさがあって笑いがあって、温もりがあって涙がある…そんな俺達の日常の始まり

「一旦荷物を取りに家に帰るわ」

「早く帰ってくるんやで優兄!」「おう!」

だが優夜はこの時この後に起きる惨劇を知らない

「遅い…遅いのお…あの馬鹿者帰ってきたら…ブ・チ・コ・ロ・シ
確定じゃ!」

優夜は色々と忘れていた

二ヶ月前〜日常の始まり〜（後書き）

関西弁って難しいですね（ーー；）はやての口調あってるか心配です

それにしても疲れましたf^_^（；）

この後はゆっくり休みたいと思います

Ave1さん感想ありがとうございました

では次で会いましょうノシ

二ヶ月前〜その後〜（前書き）

ようやく三話目です

幻空さん感想ありがとうございます！

FF零式がもう少しで発売ですね（ー；）

優夜

「唯のことだから、夢中になってこの作品のこと忘れそうだな…」

そ、そんなことないです…よ？

優夜

「なんで疑問系なんだよ…まあ取り敢えず楽しんでくれたら幸いだ」

二ヶ月前〜その後

「なんか忘れていている気がする…」

はやての家から出た瞬間から優夜は歯に何か挟まってるような感覚に襲われている

まあ優夜は実際大切な事を忘れている、出掛けた当初の目的を…

「まあいいつかあ、家に着いたら思い出すだろ」

色々あり過ぎて忘れてしまうのも仕方がないかもしれないが…そう問屋が卸さないのが臯月家である

「たたいまーっと」

「随分と長い買い物じゃったのお、それに…何故手ぶらなんじゃ？」

優夜が玄関のドアを開けるとそこには修羅がいた

「…あ、そうだ忘れてた」

「おお忘れてたおったのかあ、ほっほっほそれはしょうがないのお」

「すまんな爺さん、荷物も忘れて来ちまったよ」

「しょうがないのお…孫がわしより先に天に召されても、それはしょうがない…のお？優夜？」

「しょうがない…え？」

「優夜よ、お主…昼飯は食べたのか？」

「た…食べてきた」

「な…何を食べてきたんじゃ？」

「…」

無言の優夜とそれを見つめる玄帥

「黙秘権を…」「却下じゃ」「ですよー」

「オーディエンスを「わしら以外におらんじやる」……」

「…」

再び静かになる室内

ついに優夜が真実を告げる

「…ハンバーグ」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

「…」

「ひどいのお…わしが待つとつたのに1人で肉を食いよつて…グスッ」

孫からのあまりにも酷い仕打ちについて玄帥が…泣いた

「ちよつ？泣いた？爺さんすまなかつた！」

（マジでどうしようか…あれしかないかあ）

「爺さん…ハンバーグを食べたら…」

「な、なんじゃ？」

「妹が出来た…」

「……はあ？どういふことじゃ？」

「孫が1人増えたよ！やったね爺ちゃん！」

「止めんか馬鹿者！…いつかやると思つとつたがついに犯罪に手を染めてしまったんじゃな優夜よ…馬鹿娘…ライヤくん、わしは主らの息子を犯罪者にしてしまった…」

「爺さん重い！一気になんか話が重くなつた？それに犯罪なんて犯してねえし？」

「じゃあ、どういふことが説明するんじゃ」

「わかつた…」

買い物に出掛ける？スーパーで買い物？スーパーから出る
？野生の少女が現れた！？取り敢えずコマンドで話し掛けるを選択
？少女の口撃！こうかはばつぐんだ！？俺号泣少女爆笑
？俺はロリコンじゃねえ？少女の荷物を持って少女の？自宅に向かう
？そのまま昼飯をご馳走してもらって？妹 get だぜ！

「だいたいこんな感じ」

「…急展開が多過ぎてわからんわぁ！」シュツ！

「ゴフア！」

玄帥からのツツコミと言う名の打撃で優夜の身体がくの字に曲がる

「じ、爺さんそいつの名前ははやてって言うんだけどよ…はやての
家族になる…これだけは…これだけは許してほしい！」

「なんでじゃ？…もしかして…両親がいないんじゃない？」

「ああさすが爺さん、はやてには両親がいない…それに加えて脚が
不自由なのか車椅子に乗ってる、そんな状態でいままで1人で暮ら
してたんだよ」

「そういう状態なら、士郎に頼めばいいじゃろ、あやつなら喜んで
引き受けてくれるじゃろ」

「そうかもしれない…でも！守りたいって思ったんだあいつを！寂
しいはずなのに笑ってたあいつを！無理やり作った笑顔じゃなく心
から笑えるようにしてやりたいんだよ！」

「……………」

「よくそんな恥ずかしいセリフが言えるのお…ほっほっほ」

「言っんじゃないねえ、自覚してるよ」

「…わかった、頑張つてその娘を心から笑えるようにしてやるんじゃない」

「い、いいのか？」

「ただし、家にも連れてくるんじゃないぞ…新しい孫なんじゃからな」

「ありがとう…爺さん」

優夜はそう言つて部屋に荷物を取りに走つて行つた

「若いのお…馬鹿娘を思いだすわい、変な所ばかり似おつて…」

そう呟いた玄帥の顔はとても嬉しそうだった…

（10分後）

「今日明日ははやての家で過ごすから、それから家に連れてくるから」

「了解じゃ、あまり待たせてはいけないから、さっさと行ってこい優夜よ」

「じゃあ、行つてくるよ爺さん」

バタンッ

「…行ったのお、馬鹿娘…いや、優妃とライヤくん…お主らの息子は見つけたようじゃぞ…護りたい者を…優夜よ、どんな事があっても護ってみせるんじゃぞ」

「…それにしても難儀な力じゃなわしら臯月の力は…」

「昼飯はどつしよつかの」

二ヶ月前〜その後（後書き）

書いてて気付いたのですが…優夜のセリフが精神にガスガス来ますね

優夜

「お前が言わせただろが？」

ではまた次で会いましょうノシ

優夜

「無視かよ？」

よつごそ、新しい日常（前書き）

遅くなってすみません（；エ）

優夜

「零式をやってたんだろ？」

な…なんのことやら

零式やってましたけど…それよりも途中まで書いてたのが消えたのがショックだったんですよ（泣

優夜

「ま、まあ元氣出せや、それよりも皆様感想ありがとうございます心より感謝します」

優夜が敬語を？

優夜「おれが敬語を使っちゃいけないのかよ？」

そんな事は……ないですが

優夜

「その間はなんだよ？」

ではお楽しみください

優夜

「スルーかよ？」

よつこぞ、新しい日常

色々な規格外な人々が住んでいる魔窟”海鳴市”

規格外と言っても極一部の人々ではあるが、そんな市にある民家の前にとある青年が挙動不審に立っていた

まあ規格外の1人である優夜がこれまた未来の規格外である八神はやての家の前で数十分インターホンに手を伸ばしたり引つ込めたりしているだけである

「俺は一般人だ！…って誰に突っ込んだんだ？」

皆さんに説明しておこう

この主人公は正真正銘無添加な馬鹿である

小さい時から進んで鍛錬やらなんやらに全てをつぎ込んでいたから当然である

そんな馬鹿な主人公が何故はやての家のインターホンを押すのを躊躇っているのには理由がある

ただ、気恥ずかしいだけなのである

今まで玄帥と2人暮りだったので、あまり気にしなかったが誰かに”ただいま”というのがこんなにこそばゆい事だとは思っていないかったのである

「このままウダウダしててもしょうがない、そろそろ腹くくるか」

やっと優夜は決心がついたようで、インターホンに手を伸ばして…とその時

ガチャッ

「…優兄なにしとんねん、早く入ったらええやん」

「お、俺の決心が…はやてえ」

なんとも無駄な決心だった

あまりにも悲壮感を携えた優夜に流石にはやても申し訳なくなったのか

「なんか分からんけど、ごめんな優兄」

「いや、いいんだはやて…ウダウダしてた俺が悪いんだよ、それよりも…その、なんだ…ただいま」

「お、おかえりなさい優兄！」

こうして俺とはやての新しい日常が始まった

支えあい…笑いあい…偶にぶつかり合い…わかり合う

未来の事なんて分からない、でも…これだけは分かる…これから色々な事があるだろう、本能的なものかなんなのかわからないがはや

てを護らないといけないと告げている

でも…ごちゃごちゃ考えるなんて俺には性に合わない
ただはやてを…はやての笑顔を護る、この拳に誓って

ただそれだけだ…

ようこそ、新しい日常（後書き）

駄文にお付き合いありがとうございます

では、また次回お会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8452x/>

守護を誓う拳と少女達の日常

2011年11月16日22時29分発行